

【代表研究者】

梅垣 千尋

一橋大学大学院 社会学研究科

【研究 題 目】

イングランド啓蒙と「公論」主体としての女性

【研究の目的】

啓蒙が女性の社会的位置づけにどのような意味を与えたのかという問題は、これまで様々に論じられてきた。一方では、啓蒙思想によって女性にも人権をもった市民になる道が開かれたとする議論がある。他方では、啓蒙思想が想定した「市民」や「人間」に女性が含まれておらず、女性は啓蒙という虚構に裏切られたとする議論がある。この対立しあう見解は、しかし、いずれも啓蒙という実践がもつ多様性や複雑性、そして、その啓蒙の過程に参入した女性の主体性を十分にとらえ切れていない。本研究はこうした批判的見地に立ち、1780年代から90年代のイングランドにおいて、政治的問題をめぐる論争的な書物の出版を通じて、「公論」を方向づける役割を果たした女性著述家の活動を具体的に明らかにする。そのような分析を通じて、女性にとっての啓蒙という経験を、解放／抑圧という単純な二項対立に還元させることなく理解する道を拓くことが、本研究の大きな目的である。

【研究の内容・方法】

強力な議会の存在と出版文化の隆盛を見た名誉革命体制下のイングランドにおいて、啓蒙という実践を担ったのは、読書や議論を通じて「公論」形成にたずさわる広範な層の公衆であった。本研究は、書物の出版を通じて、自ら政治主体であるかのごとく「公的」な議論に参加した数名の女性著述家に焦点を当て、彼女たちがなぜ、またどのようにして「公論」を形成する主体になりえたのかを考察する。その具体的な検討にあたって、本研究は、次のような課題に取り組んだ。第一に、女性著述家のテキストの分析を通じて、彼女たちが、イングランド啓蒙の底流をなした複数の思想潮流をどのように利用して「公的」な言論活動に参入したのかを考察した。その際には、啓蒙思想そのものが、ロック主義的自由主義、古典的共和主義、スコットランド啓蒙の歴史理論、ユニテリアニズムといったさまざまな伝統や枠組みから成っていたこと、また、思想を受容する女性の側が、それらの要素を多様に解釈しえたことに特別な注意を払った。第二に、書簡や伝記などの分析を通じて、彼女たちが、男性知識人のネットワークや社交のあり方にどのように支えられて「公的」議論に関わるようになったのかを明らかにした。その解明にあたっては、特に、理性的非国教徒を担い手としたイングランド啓蒙の政治文化とその変容に注目し、急進主義の隆盛とともに、「公衆」の著しい拡大を見た1790年代において、「公論」が一定の排除と包括の論理をもつに至ったことに留意した。そして、第三には、以上のような分析を通じて、「公論」主体としての女性の自己認識が、文明国としての「ブリテン」の優越的な自己表象、および、「レスペクタブ

ル」なミドルクラスとしての自己定義との深い関わりのなかでかたちづくられていたことを考察した。ここから、啓蒙における女性の位置を、18世紀後半からのネーション形成や階級編成の過程において把握し直す必要性を導いた。

【結論・考察】

本研究では、イングランド啓蒙期の女性著述家がいかに「公論」形成に関わりえたのかという問題の手がかりを、異なる複数の伝統や枠組みを含みこんだ啓蒙思想の多様性、そして、啓蒙の政治文化のジェンダー的な包括性の中に見出した。イングランド啓蒙を、政治的文脈や受け手の戦略によってさまざまな様相を見せる複雑な実践としてとらえることによって、啓蒙の中に位置を見出した女性の主体的関与のあり方と、女性と啓蒙との間のダイナミックな関係性を描き出すことができたと思われる。だが、それと同時に分析のなかで明らかになったのは、イングランド啓蒙において女性の知性に与えられた高い位置が、「文明／野蛮」という図式による非西洋世界の他者化、他のヨーロッパ諸国にたいするナショナルな優越意識、そして、国内の「粗野な」下層階級にたいするミドルクラスの文化的差異化と深く関わっていた事実である。今後は、こうした啓蒙自体の重層的な表象戦略のなかで、女性著述家の位置を見定めていくべきであろう。